

キリスト教の靈性（その2）

— キリスト教信仰の本質 —

松 田 央

Christian Spirituality (2)

—The Essence of Christian Faith—

MATSUDA Hiroshi

Abstract

We must sweep away wrong images about God and practice proper prayer and meditation. Of course we must accept the Holy Spirit's work for the things.

Christian faith is a practical faith, which means concretely to accept Christ's word as the good and live following His word. Christian faith cannot exist without Christ's persona.

We can experience divine love on the practice of faith through the guidance of the Holy Spirit, and can experience divine glory which is the concrete expression of divine love.

Therefore Christian spirituality grows by believing in Trinitarian God contains three personae.

キーワード：信仰、苦痛、愛、栄光、瞑想

Key words: faith, pain, love, glory, meditation

V 実践的信仰

1. 人生の真相

イエス・キリストは、山上の説教で「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」(マタイ5:3-4)と語っている。新約学者の研究によると、「心の貧しい人々」という言葉は、元来はたんに「貧しい人々」であった。つまり、経済的に貧しい人々という意味である。そこでイエスは「貧しい人々は幸いである。悲しむ人々は幸いである」と語っていたことになる。「幸いである」という言葉は、神によって祝福されているという意味であるが、貧しい人々や悲しむ人々がなぜ神によって祝福されているといえるのだろうか。イエスは彼らにただの幻想を抱かせたにすぎないのか。宗教というものは、現実の苦しみをまぎらわすための阿片^{あへん}にすぎないのか。

しかし、人生の真相は、実はこの教えの中に隠されているのである。結論からいうならば、イエスの教えは、人生の矛盾をごまかすのではなく、むしろそれを明確にする。イエスの教えを聞く者は、生きることの苦しみを深刻に受けとめつつ、その中で神から慰めと希望を与えられる。ただし、神の慰めと希望は、社会でしばしば宣伝されているような幸福とは異なる。

世の中の人生観や価値観は千差万別であるが、大半の人々が世俗的な幸福観に支配されて生きているといえる。それは富、社会的地位、名誉、学歴、健康などが幸福につながるという価値観である。しかし、そのような価値観に基づいて幸福を実感している人々が、いったいどのくらいいるのだろうか。むしろそのような希望を持つことができない人々が増えているのではなかろうか。全国の自殺者の数は、この問題を判断するための一つの基準となりうる。警察庁が2006年6月に発表した統計によると、2005年の全国の自殺者数は3万2552人であった。1998年以来、全国の自殺者数は8年連続で3万人を超えた。一日平均89人、16分に1人が自殺している計算になる。これは、人口に占める割合では先進7ヶ国で圧倒的に第1位であり、世界でも第10位である¹⁾。

なぜ日本では自殺者が多いのか。何かの理由で追いつめられたとき、自殺によって解決や精算を図ろうとする傾向があるといわれている。そのような国民性はともかくとして、自殺は生きることの拒否であるから、生きる希望を失った日本人が増えていることは事実である。実際には自殺しなくとも生きることを断念してしまった人々がさらに多く存在しているということは、想像に^{かた}難くない。

それではこれらの人々は社会で特殊な存在なのか。生きることがつらいと感じたり、あるいは幸福の可能性を信じることができないというようなことは、何か異常な考え方なのだろうか。私たちはともすれば、世の中には幸福な人と不幸な人というあたかも二種類の人間が存在しているかのように思い込んでいる。しかし、そのような考え方はたんなる先入観にすぎないのではなかろうか。最初に引用した「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」という言葉は、この先入

観から私たちを解放してくれる。人間の目から見れば、世の中には貧しい人々と金持ちの人々がいるが、神の目から見れば、すべての人々は「貧しい」のである。金持ちの人々も自分の財産で幸福になることがないからである。また今日笑っている人々も、明日は悲しみにうちひしがれるかもしれない。悲しみのない人生などはありえない。

わが国の社会通念では、宗教的な慰めは幻想にすぎない。しかし、イエスの教えによれば、世俗的な理想の方がむしろ実体のない空中楼阁のようなものである。もし私たちが真実、幸福になりうるとすれば、それは私たち自身の力によるのではなく、もっぱら神の力による。したがって、どのように不幸に見える状態にあっても、悲しみの気分支配されことなく神の祝福を求める人は、必ず確実な平安を得ることができる。

誤解のないように断っておくと、貧しい人々や悲しむ人々がすべて幸いであるというわけではない。神の救いを求める人々は、たとえ貧しくとも、悲しんでいても、神によって祝福されるということである。貧しい人々や悲しむ人々は、自分たちの財産や力に頼ることがないから、神の救いを求める気持ちになりやすい。そうであるから、彼らは幸いなのである。イエスはおそらくそのようなことがいいたかったのである。

人間は苦しみや悲しみを避けることはできないという思想は、決してキリスト教特有のものではない。たとえばドイツの哲学者アルトゥール・ショーペンハウアー（1788-1860）は、キリスト教思想とは無関係に人生の真相を苦痛と見なしている。

苦悩を追い払おうとして人はたえず骨折るけれども、せいぜいのところ苦悩の姿を変えることくらいしかできない。苦悩の姿は、もともとは、欠乏、困窮、生活維持のための心労である。もしもうまくいって、といってもそれはたいへんに難しいことだが、この姿のうちどれか一つある姿の苦痛を追い払うことができたとしても、苦痛はたちまちまた幾千という別の姿になって現われることであろうし、年齢や境遇に応じて千変万化一すなわち性衝動、情熱的な愛、嫉妬、羨望、憎悪、不安、名誉心、金銭欲、病気、等々というあらゆる姿で現われることになるであろう。あげくのはて、苦痛の入りこめる姿というものがほかにもうないということになれば、苦痛はこんどは倦怠や退屈というしめっぽい灰色の衣装をまとって出てくることになるだろう。（中略）というのは、いかなる人間の生活も苦痛と退屈の間を往ったり来たりするよう当てもなく投げ出されているものだからである。—²⁾

おそらくたいていの読者は、この文章を読んで驚くだろう。「なんと悲観的で暗い思想であろうか」と。この印象は半分正しい。彼の思想はたしかに陰鬱で厭世的である。そこからは生に関する積極的な意味や希望の光を見いだすことができない。しかし人生に苦悩や苦痛が必然的なものであるということに関しては、彼は正しいのである。たとえば、江戸時代では封建的な身分制度によって多くの民衆は苦しんできた。今日の社会では法の下での平等が保証されているが、その結果として国民相互の競争が激化し、すでに小学生の時期から厳しい受験競争へと追いやられている。さらにショーペンハウアーは次のように語っている。

しかし、苦痛そのものは人生の本質をなすものであるし避けようのないものなのであり(必然的なものなのであり)、苦痛の単なる形態にすぎないものだけが、すなわち苦痛が姿を現わすときの形式だけが偶然に左右されるのにすぎない。ということはつまりわれわれの現在の苦悩はいまある場所をふさいでいるが、もし現在の苦悩がなければ、もう一つの苦悩が—これは今は現在の苦悩によって閉め出されているが—ただちにこの同じ場所の中へ入ってくることになるのであって、したがって本質的に考えれば運命が(すなわち偶然が)われわれに乗ずるすきはほとんどあり得ない³⁾。

受験競争を勝ち抜いて、めでたく希望の大学に入学した人はそれで苦痛から解放されるのだろうか。学生時代の自由は、つかの間の快樂にすぎない。今度は就職試験が待ち受けている。それではめでたく就職が決まった時点で苦痛はなくなるのか。今度は就職した組織の中で生き残りの競争が始まる。人生行路の諸段階で苦痛の形態は変化するが、苦痛そのものが消滅することはありえない。もし「苦痛」という言葉が不適切であるとすれば、「^{うれ}憂い」という言葉を使おう。一般常識では貧しい人々には憂いがあるが、金持ちは満ち足りていて、幸福であるはずである。しかし、現実はそのではなく、財産の有無にかかわらず、人生には憂いは付きものである。この問題に関して、スイスのキリスト教思想家カール・ヒルティ(1833-1909)は、次のように述べている。

君は、個々の、そしてひんぱんに生ずることのある憂い(絶えまなく人を悩まし、慰めるすべもない憂いは別として)は、われわれの生活に必然的な出来事だということも明らかに知らなければならない。憂いなしには人間生活はありえない。憂いを持ちながら、いや、しばしば多くの憂いを負いながら、こころ憂うことなく生きること、これこそまさにわれわれが修むべき生活技術である。(中略)ことに、たいていの人の考えによれば、富はひとを憂いから解放するものとされているが、富にそうした力はない。むしろキリスト自身がそう呼んだように、それは一つの「^{まど}惑わし」である⁴⁾。

たとえ神を信じていても、この世の憂いから自由になるわけではない。ヒルティ自身が語っているように、「神の慎重な、ゆるやかな導きは、…最も不思議な経験の一つである。それはいつも苦痛と不安とを通して行われるものである」⁵⁾。その場合に重要なことは、自分の所有するものも、自分の存在をも完全に神にゆだねる覚悟をするということである。それが幸福に通じている道である。

イエス・キリストは「愚かな金持ち」のたとえ(ルカ12:16-21)で人間に普遍的な憂いを説明している。金持ちは将来の欠乏に対して憂いを持っている。金持ちは憂いを財産の蓄積によって解消しようとしたが、それは惑わしにすぎない。人間の命は今夜にでも神から取り上げられるかもしれないからである。

福音書に登場する「金持ちの男」(マルコ10:17-22)は、多くの財産を所有しながらも、それに満足できず、永遠の命を求めて、イエスのもとにやって来る。イエスは彼に対して、「あ

なたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい」と命じた。しかし、彼はその命令に従うことができなかった。彼は財産によって永遠の命を得ることはできないということを知っていたはずである。彼は金持ちであったがゆえに、自分の富に依存し、自分の存在を神の手にゆだねることができなくなっていた。

しかし、自分の貧しさや悲しみを認識しつつ神を信じる人は、わずかな豊かさや楽しみに対しても敏感に喜ぶことができる。そのような人は足ることを知っている。神の救いを信頼する人は、日々の食べものを神から与えられた恵みであると信じて感謝することができる。なぜなら、その人は、食べものをとおして食べもの以上の命そのものを神の食卓から受け取るからである。その人が探し求めているのは、満腹することではなく、神の祝福である⁶⁾。

2. 信仰の証明

かつてヨーロッパの神学者たちは、神の存在を証明することを試みてきたが、そのような試みはいずれも失敗に終わっている。聖書の神は人間の知性を超えているので、論理的な説明で神の実在を証明することはできない。しかしそうだからといって、あえて自分の知性に逆らいながら、神の存在に賭けて、無理やりに決断していくというような信仰の在り方は感心しない。そのような信仰はややもすれば、情緒的・独善的な傾向に陥る。

ヒルティが主張しているように、超越的な神を信じることができないようにしているのは、人間の悟性（知性の一種で、科学的思考の主体）ではなく、それとは別種の心の傾向である。悟性の役目は、意志がすでに決心したものを是認するだけである⁷⁾。つまり、神を信じたくない、神に従いたくないという心の傾向（聖書では罪と呼ばれる）が、人間を不信仰にさせているのである。それゆえ、私たちの罪が信仰への道を妨げている第一の要因である。

ところで神を信じない人は、何も信じないニヒリストなのか。そうではなかろう。彼らも何かを信じて生きている。それはすでに指摘したように、この世で価値があるとされているもの（財産、地位、名誉など）である。あるいは他者の助けである。彼らはこれらの力の方が、神の力よりも頼りになると考えている。この考え方が妨げの第二の要因になる。

ヒルティの見解に従うと、神を信じることが正しいことであるかどうかは、みずから経験するほかに知る方法はない。その経験とは、全く独特な、静かで、平和に満ちた感情を持つことである⁸⁾。それによって、私たちは、神を信じないよりも、神を信じる方が幸福であることを知る。聖書にも次のような証言がある（ほかにもマルコ11：24；ヨハネ15：7；ローマ8：28；Iコリント10：13；IIコリント4：8-15；ガラテヤ5：22-23；フィリピ4：6-7）。

主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。若いときにも老いた今も、わたしは見ていない。主に従う人が捨てられ、子孫がパンを乞うのを（詩編37：23-25）。

わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る（ヨハネ4：14）。

これが信仰の証明であり、おそらくこれ以外の証明はありえないだろう。それゆえ、私たちに求められていることは、あれやこれやと神に関して議論することではなく、まず神の意志に服従して生活することである。この実践の積み重ねによって次第に私たちは、神の存在を確信するようになる。この実践なしに神を信じることはできない。

ちなみにイエズス会の創設者イグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）がまだ騎士であった時分、彼は神に仕えるべきかそれともある貴婦人に仕えるべきかで悩んでいた。あるときは神への奉仕に燃え、あるときは憧れの貴婦人のことを思い続けた。しかし、彼は二つの思いと憧れの経験を反省するようになり、両者の間に大きな相違があることに気づいた。貴婦人のことを考えると、「大きな楽しみを感じたが、それにあきて止めてしまうと、うら寂しい感じがして不満が襲って来た。ところが裸足でエルサレムに巡礼するとか、聖人伝で読んだ色々な苦行をしようと思ったりすると、それを考えている間、慰めを覚えるばかりではなく、考えを止めた後までも満足や喜びが残った」⁹⁾。

彼はのちに自分を動かす隠れた霊的能力が二つあることに気づいた。それは神からのものと「暗黒の力」（悪霊）である。神から与えられた霊的能力のみを使用していくならば、永続的な満足や喜びを享受することができるというわけである。

3. 信仰の対象

信仰とは具体的に何を信じることなのだろうか。私たちは最初に何を信じなければならないのか。この問題に関しては議論が分かれている。

ヒルティの所見によると、私たちはキリスト自身や神自身を信じる前に、善というものを信じなければならない。すなわち、この世には善なるものが存在し、それは悪に対して勝利をおさめる力を持つことを信じなければならない。悪は原理的にすでに克服されていて、したがって、悪にはではなく善に仕えようと決心しなければならない¹⁰⁾。というのは、ヒルティ自身が説明しているように、最初からキリストや神に対する信仰を要求する場合、たんなる教義の型どおりの信仰にとどまりがちで、実生活に対して本当の意義を持たないからである。

また私見によると、日本人の場合、ほとんどの人々は神に対する自覚的信仰を持たず、キリスト教に関する基礎知識も乏しいから、道徳的な次元として善を信じることから出発するという考え方は一見、現実的であるように思われる。そしてヒルティは、この義務の遂行を積み重ねることによって、次第に神やキリストに対する信仰へと進んでいくことになると考えている。

ただし、このヒルティの見解には二つの問題点がある。第一に善を信じることがなぜ神を信じることにつながるのかという根拠が明らかではない。またそもそも善という概念は、必ずしも客観的なものではない。ブレーズ・パスカルが述べているように、「ピレネー山脈のこちら側での真理が、あちら側では誤謬である」こともあるし、「盗み、不倫、子殺し、父殺し、すべては徳行のうち地位を占めたことがある」（『パンセ』294番）¹¹⁾。

聖書ではギリシア哲学のように、理想的で普遍的な善の原型が観念として想定されているわけではない。天地創造において神は、自分がつくったものすべてを見て「よい」と思った（創

世1：31)。これはつくられたものが抽象的な「善」によって測定された結果、よいという意味ではなく、ただ創造主なる神とつながりを持っているからよいということを表そうとしている¹²⁾。そして、聖書の神のみが万物の善の根源となっている。

ディオニシオス・アレオパギテース（6世紀以降）も、基本的な神の本質を善として理解している。神は完全なる善性の光を知性的存在者に注ぎ、この光によって彼らは生命を保有する。それゆえ、知性的存在者は、善を望み求め、それによって存在し、よいものとなる¹³⁾。

したがって、キリスト教において善を信じるということは、神が善の根源であることを信じて、善の光の内に生活し、みずからも善の存在者となるということである。すなわち、たんに社会通念としての善を信じるということではなく、神への信仰という意識において善を信じるということが肝要なのである。

第二にヒルティがいうように、仮に善を信じていたとしても、それが必ずしもキリストへの信仰につながるとは限らない。善の実践は、いつまでも道徳的な次元にとどまっていることもある。そのような迂遠な道を歩くよりも、むしろ最初からキリストに従うことの方が、より確実に安全な道を歩くことになると思われる。

ドイツの神学者ディートリヒ・ボンヘッファー（1906-45）の見解によると、信仰への道とは、イエス・キリストの呼び声に対する従順であり、そのほかにはない。ボンヘッファーはその聖書的根拠として次の聖句を引用している。

そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った（マルコ2：14）。

ボンヘッファーは、この聖句からキリスト教信仰の本質を見いだそうとする。すなわち、最初にイエスの（招きの）「呼び声」（Ruf）がある。それに直ちに呼応するように、イエスの呼び声を聞いた者の従順な行為が続く。レビがはたして以前よりイエスを知っていたのかどうかということは、全く主題となっていない。レビはイエスの呼び声に対して、何も語らず、たんに従順な行動によって応答している¹⁴⁾。

それゆえ、ボンヘッファーの解釈に従うと、まずイエスの呼び声がなければならない。言い換えれば、イエスの呼び声を聞くことなしには信仰は始まらない。もちろんこの場合のイエスは、教師や模範としてではなく、キリスト、すなわち、救い主として理解されている。そして、信仰とはイエスに対する従順であり、従順なものだけが信ずる。

ボンヘッファーのいいたいことは、おそらくこういうことだろう。キリスト教信仰の本質は、イエスを信じることであり、またなんらかの意味でイエスを信じなければ、信仰は生まれない（マルコ9：42；ヨハネ2：11；3：16, 36；ガラテヤ2：16）。イエスを信じるということは、イエスを神の子キリスト（救い主）として信じること（マルコ1：1；使徒2：36；ローマ1：4）であるが、最初の段階では神学的な主題は重要ではない。とりあえず、イエスに従うことなしには信仰は始まらない。

実際にイエスに従うことによって、徐々に神学的な主題は、信仰者に啓示されていく。それ

はイエスが神性を持っていること、またイエスを知っている者が、父なる神を知っているということである（ヨハネ1：1-5, 18, 5：18；8：58；14：6-11）。したがって、ボンヘッファーが主張しているように、生きたイエス・キリスト不在のキリスト教は、抽象的な観念または神話に等しい⁴⁵⁾。しかもイエスをキリストとして信じるということは、たんにそれを教義や信条として信じるということではなく、弟子たちのようにイエスの呼び声に応答し、イエスの言葉に服従するという実践を伴っている。言い換えれば、イエスの言葉を善として信じることである。

イエスは神を愛することと隣人を愛することが最も重要な戒律であると教えた（マタイ22：37-39）。また「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と弟子たちに命じている（ヨハネ13：34）。これがキリスト教の根本的な善である。

ただし、私たちは自分の力で神や隣人を愛することができるのではない。もしそのようなことができるのであれば、そもそも信仰というものは不要となる。最初から私たちが神を愛したのではなく、まず神が私たちを愛して、私たちの罪を償う犠牲として、神の子イエスをこの世に派遣した。ここに神の愛がある（ヨハネ3：16-17；Iヨハネ4：10）。それゆえ、信仰はイエスに従うことから始まるが、具体的にはイエスの言葉と行動をとおして神の愛を知り、それを受け入れていくことを意味する。この実践がキリスト教の経験である。

VI 神の愛

1. イエスの愛

神の愛を知ることとはどういうことであろうか。聖書全体を読むと、神には慈悲、恵み、怒り、悲しみ、裁きなどさまざまな属性があるように記述されている。しかし、もし私たちがイエスをとおして神を知るならば、その神は「愛」という本質のみを持っていることに気づくだろう。すなわち、神の怒りや裁きという用語も愛の多面性を表現しているにすぎない。イエスは山上の説教において次のように語っている。

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」（マタイ5：43-45）。

「隣人を愛し」は、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（レビ19：18）という旧約聖書からの引用である。「敵を憎め」は、そのままの言い回しでは旧約聖書にない。この言葉は、詩編の言葉「主よ、あなたを憎む者をわたしも憎み、あなたに立ち向かう者を忌むべきものとし、激しい憎しみをもって彼らを憎み、彼らをわたしの敵とします」（139：21-22）、および申命記の言葉「あなたの敵とあなたを憎み迫害する者にはあなたの神、主はこれらの呪いの誓いをことごとく降りかからせられる」（30：7）をまとめた語句かもしれない。

しかし一方で、旧約の中には敵や憎んでいる相手を助けるように命じる規定もある（出エジ

プト23：4-5；箴言25：21)。またダビデやエリシャは敵の命を助けている（サムエル上24：7；列王下6：22)。それゆえ、イエスの教えは旧約の戒めに反するものではない。イエスは旧約の律法を根本から否定して、それとは異質な教えを提示しているのではない（マタイ5：17-19)。

それではなぜイエスは「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている」という句をここで持ち出しているのか。イエスの時代、イスラエルはローマ帝国によって支配されていたので、イスラエル人の中にローマ人を敵視し、憎む気風があったといわれている。すなわち、当時の大半のイスラエル人にとって敵（直接にはローマ人）を憎み、彼らと戦うことが正義であると見なされていた。このような道徳観は厳密に言えば、旧約全体の精神に矛盾するが、彼らは旧約の中から自分たちの道徳観に合致する箇所だけを選んで、それを正義の根拠としていたのではないかと想像される。

すでに述べたように、いつの時代にも人間の善悪の基準は相対的なものにすぎない。敵を愛するということは、ボンヘッファーが説明しているように、「自然的な人間の力を超えたことであり、また彼の持っている善悪の概念には違反するものである」¹⁶⁾。そして、イエスの弟子たちにとってローマ人だけではなく、ユダヤ人も「敵」であった。彼らは、日常的にキリスト教徒を敵視し、イエスの教えを非難していた。それゆえ、イエスに従うということは、敵をつくらず、「こぢんまりとした平和を享受する」ということを意味しない。どのような環境にあっても敵は存在するのである。

聖書の神を善の根源として信じることによって始めて、私たちの正義は独善から解放され、柔軟性を持つことができる。そして、イエスは律法学者のようにではなく、「権威ある者」として神の正義を私たちに表明している（マタイ7：29；9：6)。「権威ある者」とは神の権威を授けられた者、つまり、神から遣わされたキリスト（救い主）を意味する。イエスは、旧約を否定しないが、律法学者のように旧約の規定に縛られていない。イエスはキリストとして従来のあらゆる律法を超越して、直接神の正義を教える。より正確に言えば、イエスの人格をとおして神の正義が啓示されるのである。

神は善人にも悪人にも太陽と雨の恵みを与える。これは一般に誤解されているように、神の愛は善悪の区別を超えているということではなく、神にとってすべての人間を愛することが善であり、正義なのである。したがって、愛と正義は矛盾しない。神の意志にかなった愛の実践は正しいことである。

ディオニシオス・アレオパギテースの教えによると、善とはそこから万物がその存在を得るところのものである。つまり、善とは、存在の根源であり、命の源である¹⁷⁾。それが神である。神は善そのものであり、命そのものである。神は太陽のように万物を命の光で照らすゆえに、愛なのである。したがって、聖書には「神は愛である」（Iヨハネ4：8）と書かれている。

ヨハネ文書ではイエスの愛をとおして神の愛が啓示されている。イエスの愛を受け入れる者は、神の愛を受け入れる。神の愛はたんなる理想的な観念ではなく、そのひとり子キリストをこの世に遣わしたという歴史的出来事において経験される（ヨハネ3：16-17；Iヨハネ4：9-10)。

ところでヨハネ福音書では「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神のひとり子^{ひと}の名を信じていないからである」と書かれている（3：17-18）。もし神の本質が愛であるならば、神はすべての人々を救うはずではないのか。不信仰な者を裁くということは、神の本質と矛盾するのではなからうか。

「信じない者がすでに裁かれている」ということは、「神が下す宣告というよりも、むしろ人間の心に隠れている秘密の暴露」¹⁸⁾であると解釈することができる。神はすべての人間が神の光を受け入れることを望んでいる。しかし、同時に神は人間の自由意志を尊重するから、もしある人が神の光を拒むならば、その人の罪は残り、裁きはすでに行われたことになる（ヨハネ3：19-20）。神は万物を生かすためにつくった。滅びは神の本意によって起こるのではない。神を信じない者は、言葉と行いでみずからに死を招き、死を仲間と見なして身を滅ぼす（知恵の書1：14-16）。インドのキリスト教伝道者スダール・シング（1889-1929?）も「地獄とは、人が自由意志によって神に背き、自分自身の内部に苦悩の状態を造る、という意味だ。地獄はある特定の場所の名前ではない。…地獄というのは、神の内に存在しない状態のことであり、神と霊的に結ばれている真の崇拜者ならば、罪とそれによる苦しみのこうした状態から永遠に救われるだろう」と述べている¹⁹⁾。

ただし、そうであるからといって、洗礼者ヨハネによる神の怒りと審判の告知（マタイ3：7-12）をいい加減に聞き流してよいというものではない。スイスの神学者エーミール・ブルンナーによると、人間が悔い改めない場合、つまり、神の恵みを拒否する場合、「神の怒り」（ヨハネ3：36）が恐るべき現実として「とどまる」のである。神の怒りの教説が誤りであるというわけではなく、それは「恐るべき、無限の現実」である²⁰⁾。神はすべての人間を愛するがゆえに、悔い改めない人間を冷淡に放置するのではなく、その人間に対して怒りの炎を燃やさざるをえないのである。つまり、神の愛の人格には怒りの要素が含まれている。

イエスは「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」（マタイ10：28）と教えている。人間の魂をも滅ぼす権能を持っているのは、聖書の神のみである。聖書の神はそのような権能を持っているからこそ、畏れ敬われるべきであり、また信頼に値する。したがって、「神を愛する」という行為は、天真爛漫に神の恵みに甘えるということではなく、畏敬の念を抱いて神に服従するという要素を本質的に内包している。

イグナチオ・ロヨラは、地獄に関する黙想を五つの要点で説明している²¹⁾。この黙想では地獄に落ちたものが堪え忍んでいる責め苦を自分で感得することを願う。というのは、「私たちの過ちのために永遠の主の愛を忘れることが仮にあったとしても、せめて地獄の責め苦の恐怖のために、私たちが大罪に陥らないようにするためである」。

第一要点 想像の目で、地獄の燃え狂う炎と、その中で焼かれている魂たちを見る。

第二要点 耳で、地獄の泣き叫びと悲鳴を聞き、主キリストと諸聖人に対する冒瀆の声を聞く。

第三要点 鼻で、地獄の噴煙と硫黄の悪臭と、ごみ溜や腐敗物の悪臭をかぐ。

第四要点 舌で苦い物を味わうように、地獄で流される涙、悲しみ、良心の呵責を味わう。

第五要点 手で触れるように、地獄の炎が魂に触れ焼き尽くすのを身で感ずる。

すでに述べたように、地獄の本質は神の愛を喪失することにある。問題はその状態をたんに観念として理解することではなく、できる限り、五感で感じることができるよう黙想し、その恐ろしさと苦しみを経験することである。それによって私たちは神の愛の現実性を以前よりも深く体得することができるだろう。

2. 神の栄光

ドイツの神学者ヴォルフ・クレトゥケの見解によると、聖書における神の特性の明確さは、神の「栄光」という概念によって示されている。神の栄光は、神の愛の具体的表明であり、それは具体的な啓示の出来事において人間の意表をついて啓示される²²⁾。

栄光を意味するギリシア語は、「ドクサ」δόξαであるが、これは神の輝き、栄誉、永遠の力、などを意味する²³⁾。換言すれば、神の栄光とはその愛と真実さを示す力にほかならない²⁴⁾。たとえば、パウロにとってドクサは神の創造的力として認識され（ローマ1：20, 23）、またキリストにおける神の愛を見ることによって示される（Ⅱコリント3：18；4：6）。したがって、その意味で私たちは神の輝きを視覚的なイメージとして経験することができる。私たちは罪を犯して、神の栄光を受けられなくなっていたが、キリストの贖罪によって義とされ、神の栄光の本質に参与することができる（ローマ3：23-24；8：17-25）。

ディオニシオス・アレオパギテースの解説によると、太陽はその存在そのものによって万物を照らす。神の特性も同様であって、その固有な特性に従ってその光をすべてのものに分け与える²⁵⁾。神の本質は愛であるが、この本質は栄光の輝きという具体的な働きによって私たちに啓示される。私たちは神の栄光において永遠の命の輝きと愛の充満を経験しうる。

ただしすでに述べたように、私たちは、神の栄光に対する畏敬の気持ちを持たなければ、神の愛を正しく理解することができない。そこで聖書では神の「聖」という言語が神の栄光の描写として使用されている。「聖」は世俗的なものとの区別という概念を含んでいる。聖なるものは、なにかしら超自然を感じさせる力・神秘・尊厳を備えており、人間はそれと相対するとき、畏怖を感じるとともに、それに引きつけられる。そして、神の聖の顕現に出会うと、自己の卑小を自覚する²⁶⁾。たとえば、預言者イザヤは「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」という天使たちの声を聞き、神の栄光を聖なるものとして認識した。そのとき同時に自分は罪ある者で滅ぼされるという畏怖の感情を抱いた（イザヤ6：3-5）。そして、このような畏敬の念をとおしてはじめて自分の罪が許され、神の聖によって清められたことを経験した（同6：6-7）。

新約聖書では神の栄光は、イエス・キリストの人格とわざによって最も明確で完成された次元として表明されている。パウロによると、イエスの復活は神の栄光の出来事である。イエスは父の栄光によって死者の中から復活させられた（ローマ6：4）。復活は死に打ち勝つ神の力のみならず、人間を救済しようとする神の愛をも証明している。つまり復活は十字架の出来

事に救済的な意味があるということを告知する機能を持っている。というのは、もし復活という出来事がなければ、イエスの死はたんなる人間の死で終わってしまうからである。神は罪人である人間を愛するがゆえに、イエスを十字架の死に引き渡した。なるほど神の栄光は、イエスの復活において最も明瞭に表明されている。しかし、それは神の愛と真実の具体的表明であるから、十字架の死においてすでに開示されているともいえるのである。

なかんずくヨハネ福音書ではこの思想が明示されている。イエスはカナの婚礼においてすでに「しるし」(セーメイオン)によって栄光を現している(ヨハネ2:11)。イエスは、清めのための水をおどろ酒に変える。ユダヤ教では水は清める機能を持つとされていたが、神の目から見れば、それはまだ物質的な清めにすぎない。イエスはこの水を聖霊によって清めて、真に聖なるものとしてつくり変える。またヨハネの思想ではイエスの十字架の死は、この世に対する悲惨な敗北ではなく、栄光を現すためのしるしである(同12:23-24; 13:31-32; 17:1)。なぜならば、復活は十字架の死なしには起こりえないのであり、十字架と復活は相即不離の関係にあるからである。イエスの死は新しい霊の命を生み出すのであり、イエスは救い主として自分の命を犠牲にすることによって永遠の命を人々に分け与える(同6:35, 53-58; 12:23-25; 19:34)。

ところでキリスト教の神は三位一体の神であるが、クレトゥケの所見によると、神の栄光の概念は、三位一体論と不可分に結びついている。すなわち、三位一体の神の本質は、その栄光において一致と相違が矛盾することなく完全に人間に伝達されることにある。この意味で三位一体のペルソナ(位格)は、神の栄光によって支配され、ほかのペルソナのために開かれたペルソナである²⁷⁾。三位一体論について若干、解説すると、キリスト教の神は、本質として一つでありながら、その内部に父と子と聖霊という三つのペルソナを含んでいる。つまり、子なるキリストと聖霊は、父なる神と同じ本質を共有している。神は三つのペルソナにおいて相違を含みながら、本質において一致している。このような教理は単純に考えると、矛盾した考え方に思えるが、クレトゥケは、神の栄光という原理において三つのペルソナが一致していると考えている。

さらにクレトゥケによると、神のあらゆる「明確さ」(Klarheiten)は、世界に対する神の運動に基づいて開示される。その運動は、イエス・キリストの歴史における出来事であり、聖霊において出来事のままとどまる。それによって神の栄光、すなわち、神の本質は表現されている。また神のあらゆる明確さは、神の人間的具體化と三位一体において表現されている。神の栄光は、父と子と聖霊の関係においていつも具體化している²⁸⁾。

ラテン語の「ペルソナ」(persona)とは、ギリシア語の「プロソポン」*πρόσωπον*と同様、元来は役者がある特別の役のためにつける仮面を意味する²⁹⁾。仮面は頭全体を覆い、口の部分が大きく開いていた。普通、粘土でつくられ、時折、木の皮を素材としていた。また「ペルソナ」には、役者が演じる配役、登場人物、人間という意味もある。あるいは一般的に人間を意味することもある。役者が仮面と演技により登場人物を観客に表現するように、キリストは、そのペルソナにより神の栄光を人間に啓示する。また「ペルソナ」の語源である「ペルソノー」(persono)という動詞は、あるものを通り抜けて音が響くという意味である。つまり、神の一

つの本質は三つの顔、三つの役割、三つの表現形式を通り抜けて人間に伝達されるということである。それゆえ、リヒャルト・シェフラーの解釈によると、ペルソナは聖なるものまたは神性を表現し、イエスの時代に神はイエスのペルソナを通り抜けて語り、行動した³⁰⁾。

私見によると、神の栄光は、現代の世界においても聖霊のペルソナを通り抜けて表明されている。聖霊は、神の霊であり、キリストのペルソナと交流している。そして、この世のあらゆる場所において活動し、神の愛と力を証言している。また「ペルソナ」には響かせるという意味もある。聖霊のペルソナは、聖書を用いてキリストの声を私たちに響かせている。それゆえ、私たちは、直接、聖霊と交わることによってキリストと交わり、神の栄光に参加することができるのである。

VII 結 論

「キリスト教の霊性」はまだ一般的な術語とはいえないが、その内容の理解は、キリスト教信仰にとって不可欠なものである。霊性は人間の内面の探究によって育成されるが、それはたんに本来の自分の発見ということにとどまらず、キリストの形へと新たに形成されることを伴う。そのためには誤った神のイメージを払拭し、適切な祈りと瞑想を実行しなければならない。もちろんそのためには、聖霊の働きを受け入れなければならない。

またキリスト教信仰とは、実践的な信仰であり、具体的にはキリストの言葉を善として受け入れ、その言葉に従って生活することである。キリストのペルソナなしには信仰は成立しない。そして、聖霊の導きにより信仰の実践において私たちは神の愛を経験し、その具体的表現である神の栄光を経験するのである。それゆえ、キリスト教の霊性は、三つのペルソナを内包する三位一体の神を信じることによって養われる。

注

- 1) 『産経新聞』2006年7月13日付け朝刊。
- 2) アルトゥール・ショーペンハウアー『意志と表象としての世界(Ⅲ)』西尾幹二訳、中央公論新社、2004年、14-15ページ。
- 3) 同書、15-16ページ。
- 4) カール・ヒルティ『幸福論(第2部)』草間平作ほか訳、岩波書店(岩波文庫)、1962年、44ページ。
- 5) カール・ヒルティ『眠られぬ夜のために(第1部)』草間平作ほか訳、岩波書店(岩波文庫)、1973年、168ページ。
- 6) セーレン・キェルケゴール『キリスト教談話』藤木正三訳(『キェルケゴール著作全集第11巻』)創言社、1989年、27-28ページ。
- 7) カール・ヒルティ『眠られぬ夜のために(第1部)』49-50ページ。
- 8) 同書、152-153ページ。
- 9) イグナチオ・デ・ロヨラ『霊操』門脇佳吉訳・解説、岩波書店(岩波文庫)、1995年、29-30ページ。
- 10) カール・ヒルティ『幸福論(第3部)』草間平作ほか訳、岩波書店(岩波文庫)、1965年、60-61ページ。
- 11) ブレーズ・パスカル『パンセ(I)』前田陽一ほか訳、中央公論新社、2001年、217ページ。
- 12) X・レオン・デュフルほか編『聖書思想事典』Z・イェール翻訳監修、三省堂、1973年、512ページ。
- 13) デイオニシオス・アレオパギテース『神名論』熊田陽一郎訳(『キリスト教神秘主義著作集第1巻』)

- 教文館、2002年、168-169ページ。
- 14) Bonhoeffer, Dietrich, Nachfolge, in: Dietrich Bonhoeffer Werke Bd. 4, Gütersloh: Chr. Kaiser, 2002, S. 45-46. 翻訳書としてディートリヒ・ボンヘッファー『キリストに従う』森平太訳、新教出版社、1972年を参照した。
 - 15) Ibid., S. 47.
 - 16) Ibid., S. 141.
 - 17) デイオニシオス・アレオパギテース、前掲書、173ページ。
 - 18) X・レオン・デュフルほか編、前掲書、379ページ。
 - 19) 『スندگان・シング著作集第2巻』河合一充ほか訳、ミルトス、1999年、180ページ。
 - 20) 『ブルンナー著作集第2巻』熊澤義宣ほか訳、教文館、1997年、213-214ページ。
 - 21) イグナチオ・デ・ロヨラ、前掲書、114-115ページ。
 - 22) Krötke, Wolf, Gottes Klarheiten, Tübingen: J. C. B. Mohr, 2001, S. 84, 103-105.
 - 23) Balz, H. and Schneider, G., Exegetical Dictionary of the New Testament, vol. 1, Grand Rapids: Eerdmans, 1994, pp. 345-346.
 - 24) X・レオン・デュフルほか編、前掲書、108ページ。
 - 25) デイオニシオス・アレオパギテース、前掲書、168ページ。
 - 26) X・レオン・デュフルほか編、前掲書、496ページ。
 - 27) Krötke, Wolf, op.cit., S. 102.
 - 28) Ibid., S. 114-115.
 - 29) Kelly, J. N. D., Early Christian Doctrines, 5. ed., London: A & C Black, 1968, p. 115.
 - 30) Schaeffler, Richard, Philosophische Einübung in die Theologie, Bd. 3, Freiburg und München: Karl Alber, 2004, S. 283-284, 291.

(原稿受理 2007年3月14日)